

## 『ファウスト』第二部の 「フィレモンとバウキス」

長谷川 茂 夫

ゲーテの『ファウスト』で筋を構成している様々な出来事は、大別して二つに分類される。ひとつは、古くからのファウスト伝説で語られているエピソードをそのまま踏襲したものであり、グンドルフによれば、宮廷での活動やヘレナの召喚などはこれに属する<sup>1)</sup>。だが、その際にゲーテ独自の意味付けがなされていることは言うまでもない。そして、もうひとつは、ゲーテが自らの文学的意図を実現するために創作したものであり、「フィレモンとバウキス」にかかわる事柄は、後者に数えられる。1831年6月6日のエッカーマンとの対話でも明らかのように、この場面は *Sorge* の場や臨終の場が出来た後になって付加されたものである。本論では、そのドラマトゥルギーに於ける必然性を、即ち、これなくしてはファウストの死と救済のモチーフ付けが不完全であるとゲーテが判断した理由を考察して行きたい。

ゲーテ以前に書かれたファウスト博士の物語、例えばクリストファー・マローに於いては、主人公が最後には悪魔の手中におちているが、その際の地獄行きは、いわば免罪符的な性格を持っている。即ち、人間の心の底に秘められている、道徳規範を超えた行動への欲望を舞台の上で解放したことの代償なのである。それに対しゲーテの場合には、「天上の序曲」によってファウストの救済が最初から決定されていると言ってよい。単なる奇人の域を越えて、いまや人間の典型にまで高められたファウストが救済されることは、最優先の要請と意識されたのである。しかし、必ず勝たなければならないこの賭けが、観客を鼻白ませるいかさまへと転落しないためには、それなりのルールが必要となる。まずそれは、人間が何らかの奸計により悪魔を出し抜いて為されるものであってはならない。当座の機知を楽しむ小話や童話になら許されるこの解決法は、ファウストの生き方が提示する問題性を到底担いきれないからである。この解決法の一変種には、主人公の悔悟または変節がある。即ち、意図的にせよ無意識にせよ、彼が最後に行った善行が、それまでの罪を消滅させ、救済に結び付くというパターンである。だが、それも同様に許されるべきではない。問題性の究明を放棄するこれらの手段によるのではなく、ファウストは、その行為の

全責任を負ったまま、その悪しき行為にも拘らず救済されなければならない。そして逆説的ではあるが、その悪しき行為がまさに救済への道程となっているのだという矛盾が、解決されなければならないのである。

第五幕でのファウストの干拓事業は、社会に対する福祉と解されやすい。この事業の動機が、「奔放な四大の無目的な力(V. 10219)」に対するファウストの気まぐれとも言える反抗心に発しており、その実現には悪魔の助力が不可欠である事実とは無関係に、新しい土地が生み出され、民に頒ち与えられるという結果は、必然的に利他的な行為の性格を帯びてくる。しかし、ファウストはこれまで意図して利他的であったことは一度もなかったし、今回も例外ではない。彼に係わった者達は、彼の利己的な欲望に巻き込まれ、幾人もが破滅の道を進んで来ている。グレートヘンは彼との恋愛で身を滅ぼし、皇帝の場合は紙幣の発行と呪われた戦争手段によって地位を脅かされ、権利を教会に浸食される羽目に陥っている。そして、この「福祉行為」ではフィレモンとパウキスが、殺人の被害者となっているのである<sup>3)</sup>。

しかし、フィレモンとパウキスの存在理由は、本来「善行」である筈の干拓に罪の汚点を付け、他の行為と同列に置くためだけに登場し、あっけなく殺されてしまうことに留まるものではない。彼らの存在によってファウストの事業の幻想性が暴かれ、また彼らの生そのものが、ファウストの生き方に対する対極として重要な位置を占めているのである。

「フィレモンとパウキス」という名前からは、古代の文学的遺産ゆえに、生涯を通じて自然の恵みに満ちた穏やかな生活が連想されがちである。シュラッファーが「最後の『自然な』関係、即ち労働と商業によって成り立つのではない関係<sup>3)</sup>」と言うとき、背後にはこの先入観が控えているのかもしれない。しかし、この老夫婦の暮らしを、ゲーテはそうのように想定しているのであろうか。「私のフィレモンとパウキスは、有名な夫婦とは無関係<sup>4)</sup>」とエッカーマンに語ったとき、彼は独自の人間像を作りあげたという自覚を懐いていたはずである。それが神話の人物と異なっている所以の第一は、極めて当然であるがゆえにかえって見逃されやすいものである。即ち、彼らの土地が太陽に溢れたギリシャではなく、北方の「荒涼と伸び広がるおぞましい地域(V. 10215)」、 「専横な海(V. 10229)」が荒れ狂うところにあったことである。そこでの生活が所謂「牧歌的」なものでありえただろうか。むしろ彼らなりの生を勝ち取るための不断の活動を、海との闘いで強いられてきた、と考える方が妥当であらう。それを示唆する箇所が、彼らの登場する短い場面のなかに幾つも存在している。今でこそ老齢の為に長い休息を必要とはするものの、「短い目覚めの間の素早い仕事(V. 11062)」が、フィレモンの得意とするところなのである。彼らに精神の退化

や停滞の兆候はない。更には、「当時既に高齢であった(V. 11054)」フィレモンが荒海の中から難破者を救出する雄々しい姿を想像することもまた、読者(聴衆)には要求されている。

フィレモンがファウストの対極であるとは、その人生のすべての要素において、ファウストとは正反対であるという意味ではない。むしろ彼がファウストに共通する活動性を備えていた皮肉な証明を、干拓事業に対するフィレモンの肯定的評価に見いだすことができる。彼にとって新しい土地は「楽園の有様(V. 11086)」を呈し、それを成し遂げたのは「賢明な殿ばらの大胆な御家来衆(V. 11091)」なのであり、自分が「寄る年波で以前のようにおいそれとお手伝いもできなかった(V. 11086f.)」ことを残念に思うほどなのである。それゆえ、こう考えることは不適當である。即ち、ファウストの事業によって、前近代的で牧歌的な穏やかな生が崩壊してゆき、それに代わって強大な集中権力によって遂行される合理的な生活様式が新しく栄えるのだと。

コメレルが彼に関して「拘束された存在、植物の忍従を備えた生と衰退」<sup>5)</sup>と言うとき、そこに含まれる否定的なニュアンスに対しては、異議を唱えざるを得ない。一方、クルト・マイは「この非常に高齢な夫婦は、人生の終幕にさしかかった活動的な人間を具現している」<sup>6)</sup>と評してはいるのだが、老齢の特徴として「あらゆる変化に対する不安」<sup>7)</sup>を見ている。その最も端的な現われは、ファウストの提供した新しい土地との交換を拒絶したことといえようが、しかし、そのような一般的洞察からここでのフィレモンとパウキスの態度を説明することで、果たして充分であろうか。現実問題として彼らの住んでいる土地は既に容容してしまっているのである。即ち、海岸での生業を常としてきたものたちが、いまや平地の真っ只中に置かれているのだ。それならば、いっそのこと唯々諾々として新しい土地へ移植され、その際に以前の環境と似た代替地を望むほうが変化に対する消極的な対応であり、植物的な忍従と言えらるだろう。彼らが自分達の土地に寄せる執着の念は、新しい生活を始める精神的活力や若さの欠如だと、単純に判断されるべきではない。その土地が彼らの生涯と深く結び付き、今や彼らの生そのものと同義語となっているからこそ、文字通りの陸の孤島を取り囲む異質な環境にも彼らは耐えているのである。無目的にうねりを寄せては返す海が人間の生そのものの象徴ならば、ファウストの干拓は、それを強大な力で征服しようとする意志を表している。「自由と生活を日毎に獲得しなければならぬ(V. 11576)」幾百万の民を、彼は死の直前に夢想するのであるが、フィレモンとパウキスこそ、たとえ小規模にはあっても、そのように「有為な年月(V. 11578)」を送って来た者たちなのである。

ファウストの干拓事業が持つ社会的な意味とは、結果的にこのような人々か

ら活動の拠りどころを取り上げてしまうことなのである。他の土地へ移れば失われてしまう彼らの生の内実を構成する要素は、ここでは菩提樹と礼拝堂と粗末な小屋とで成り立っている。存在そのものに対する人間の敬意と、存在からの人間に対する慈しみの象徴を、そこには読み取ることができる。そして自己の生を肯定するこの愛着の念こそ、第一部で、それまで送って来た学究としての生の閉塞性を唾棄し、変転する世界へと踏み出したファウストに欠けている特質なのである。ファウストの本質に根差すこの対比ゆえに、礼拝堂は、彼にはその「朽ちた (morsch) V. 11158」姿がまず眼に映り、それでいながら彼という存在に対する「眼の刺、足の裏の刺 (V. 11161)」となっている。

何物にも満足しないこととは、何物をも上述のような意味では愛さないことである。ファウストは、恐らくグレートヒェンをもヘレナをも愛していなかった。グレートヒェンの若々しく純粋な魅力をすべて味わいはしたであろうが、決して彼女の生を己が生と同一化させはしなかったであろう。そして、ヘレナの完全な美を感嘆する心に嘘はなかったに違いないが、オイフォーリオンをも加えた生活が持続することへの嫌悪を彼はいち速く表明していたのである。「こんなことはすぐ済めばいいのに。このまやかしは少しもおもしろくない。(V. 9752ff.)」と。

いわば、既存の世界全体から疎外されているファウストにとって、存在の正当性を認めることのできる対象は、自己の力が影響を及ぼしたものだけなのである。「地霊」との対決で打ちのめされる以前には、彼は直感的認識の裡に自己と自然との間の和解と合一を見いだすことを期待していた。「世界をその最奥で束ねているものを認識できるようにと (V. 382f.)」熱望し、「限りなき自然よ、お前をどこで掴まえようか (V. 455)」と、空しい試みに心を砕いていたのである。しかし、地霊の峻厳たる拒絶にあつて、その道も断たれ、「お前が先祖から譲りうけたものでも、我が物となすには、それを獲得せねばならぬ (V. 682f.)」との決意に達した彼は、「行為」によって自然＝世界に自分の刻印を押し、それを己が物として実感する方向に踏み出した。そして第一部の小世界から第二部の大世界を通じて、幾つかの錯誤を犯し、獲得と喪失を繰り返した果てに、いまフィレモンとパウキスの固守する僅かな土地をめぐる、抑えきれない不満感を懐いている。それが彼の「世界所有を損なっている (V. 11242)」と感じないではいられない真の原因は、彼の「行為」とは無関係なままでも、完結した自己充足の裡にフィレモンとパウキスの生が営まれ得ているという厳然たる事実なのである。

ここでファウスト自身の、「行為」観の変化について述べておかねばならない。第一部から第二部第三幕まで、それは認識の手段として、自ら体験すると

いう意味を帯びていた。しかし、第四幕に至り「この地上には、まだ偉大な行為への余地が残されている(V. 10181f.)」と言って、新しい活動への意欲を示すとき、彼はそれを「支配権」と「所有権」という言葉で表現するのである。

「支配権をにぎるのだ、所有権をだ！行為がすべてだ、名声は無だ。(V. 10186 f.)」そして第五幕に於いて、行為は、命令する精神にまで還元されている。「この上なく偉大な事業が遂行されるには、千本の手にたいする一つの精神で充分(V. 11509f.)」なのであり、彼は自分の命令によって為された干拓を「自分が行った(V. 11246)」と見做している。

上述の「世界所有」とは、文字どおりの意味である。ファウストが所有したかったもの、即ち、自己の刻印を押したかったものは、一片の土地なのではない。それを所有するという形態において、フィレモンとパウキスの存在様式を自己の原理に、即ち「強大な意志の決断(V. 11255)」と彼が呼ぶものに、従属させたかったのである。フィレモンとパウキスの生そのものとなっているこの土地を、その存在の意義を保持したまま入手するという本来不可能な企てには、彼らがファウストの開拓した土地に住まうという儀式が必須の条件となる。ファウストが彼らの為に「立派な地所(V. 11276)」を用意したのは、決して慈善的な理由からではない。それこそが、彼自身にも明確には意識されていない願望の実現へ向かう手段だったのである。それゆえ、既に物見の塔があるにも拘わらず彼が望楼にあれほどこだわった理由も、「無限の果てに目を投ずる」ことよりも、それに続く「寛大ないたわりを感じて晩年を朗らかに楽しむあの老夫婦の住む、新しい家を見る(V. 11346ff.)」ことの方に重点がある。

フィレモンとパウキスを住まわせてこそ初めてファウストの事業が意味を持ち得る理由には、もうひとつ彼らが隣人の代表となっている事情も付け加わる。「旅人」は当然除外するとして、彼ら以外には、ファウスト又はメフィストの直接の臣下ではない普通の人々は登場しない。その人々こそ、最後にファウストが夢見る「自由な土地の自由な民」である筈なのだが、そのような人々は、舞台上に上がらないだけでなく、未だ存在していないのである。なぜならば、パウキスの言うように、干拓の実際は殆どを夜中に「炎」が行ってきたからで、それらの民が自ら勝ち取ったものではないからである。そして、ファウストの死後にそのような民が存在しはじめる必然性もない。彼の堤防も突堤も直に崩れ落ち、広大な土地も元通り「不毛な(unfruchtbar)(V. 10213)」な浪に呑みこまれてしまうだろうことを、メフィストは予言している。

「というのも、お前さんは、水の悪魔のネプチューンに大盤振るまいの段取りをつけているわけだからな。(V. 11546f.)」

第五幕で登場するファウストは、一種の危機的状況に置かれている。第二部

他の幕が総て、その直前の破局からの新たな再生で始まっていたことを考えれば、特殊な展開だと言えるだろう。<sup>9)</sup>それは丁度第一部に於ける最初の「夜」の場合に似ている。彼は既に老人であり、そして現状への不満で心を苛まれている。この状態に至る長期の心理的な葛藤があったはずである。しかし、それは当然のこととして、舞台には上らない。積み上げられ発酵したものが急展開する場面が、ドラマを成立させるからである。會ての「夜」は総ての奇異(Abenteuer)の発端であったが、ここは終局の発端である。ゲーテがエッカーマンに語った算定では、ファウストは100才になっている。<sup>9)</sup>第四幕での開発権授与から、ひたすら同じ事業に精力を注ぎ、何十年も経ったのであろう。しかしここでは、極めて素朴ではあるが、この状況の真剣さを損なってしまう虞れのある疑問が生ずる。その間なぜ彼は肉体の衰弱を放置したまま、再度の若返りを試みなかったのだろうか。臣下や隣人達に対する配慮であろうか。完全なよそ者としてギリシャに侵入した場合とは異なり、この地では現実の時間に即して年齢を加えることを余儀なくされたのだろうか。しかし一夜のうちに堤防を作り上げる領主が、超自然的な存在として老衰から身を守る術を知っている。それによって独裁者としての地位がいまさら脅かされはしないであろう。何よりも、独裁者は自分の肉体的年齢を隠蔽糊塗する手段には事欠かない筈である。

ファウストは自分の老化に気付いていない、と見るのが正しいのだろう。後に Sorge によって盲目にされたとき、その事実に気がつかないように。そしてメフィストがそのように仕向けて来たことは充分考えられる。彼は、自分の仕掛けたどんな誘惑にも陥らなかつたファウストの衰弱を、悪魔に相応しい忍耐で待ち続けたのであろう。いつの日にか「時が主となり、老人がここの砂の中に横たわる (V. 11592)」ようにと。しかし、ファウストは精神的に衰弱しているわけではない。クルト・マイの韻律分析によれば、彼の話ぶりに「活力の枯渇は見受けられない。」<sup>10)</sup>そして、もう一つ考えられる理由は、魔術に対する無意識の嫌悪感である。だが、それは未だ完全には成長しきってはいない。それが明確にファウストの態度に現れるのは、後の Sorge との対決まで持たなければならぬ。

メフィストーフェレスは、船団活動による留守の後、恐らく久しぶりに会つただろうファウストから、フィレモンとパウキスの存在に対する鬱憤を鐘の音への苦情として聞かされ、例によって底意地の悪い、持って回った答え方をする。それは一聴すれば相手に同意しているようなのだが、裏には批判を隠し持っている。彼は話を一般化して、「そもそも鐘の音というものは気高い耳には不快に聞こえるものですよ。(V. 11261)」という言い回しを取るが、その内実はフ

ファウストに対する当てこすりなのである。彼は、老夫婦の鐘が何故ファウストにとって「主たる心労 (V. 11259)」となっているのか、その本質を見抜いていない。そして、無論のこと、彼はファウストの事業の意義など毫も認めていない。人間の行為など空虚なものだと最初から見なしているメフィストの目から見ても、フィレモンとパウキスの、篤実で他人にも善を及ぼし、神に親しみ、それゆえメフィストにとって侮れない生に比べて、ファウストの、常に自己をも他人をも破局へと向かわせる生は、「ピンとボンという響きの狭間で消えていった夢 (V. 11267)」なのである。

ファウストから「彼らをどかす (V. 11275)」よう命令を受けたメフィストは、「観客に向かって (ad spectatores)」、ナボテの葡萄園の名を挙げている。これによって、メフィストには最初から老夫婦殺害の意図のあったことが、明白となる。彼は、主人の意向をくみとって、その意に添うよう努力する召使いではない。ファウストが罪への兆しを示したときには、それが現実として確定するように行動するからである。しかし、このようにメフィストがファウストの本夾の願望を歪めて実行したが故に、フィレモンとパウキスの殺害はファウストの行いではないと考えるならば、それは誤りである。何故ならば、上述のように、今の地位にいるファウストにとって、命令することが行為なのであるから。

このメフィストの残虐行為を、「見るために生まれ (V. 11288)」、それを喜びとする塔守リュンコイス<sup>11)</sup>が目撃する。リュンコイスにとって、「見る」ことは、その対象に寄せる賛美と同意義なのである。第三幕で最初にヘレナを讚えたのが彼であった。そして「深夜」物見台の上で、彼は世界の美しさを謳っている。その世界は、いままで彼が目にして来たものであり、いまは暗闇のなかに沈んでいるとはいえ、そこに紛れもなく存在している筈のものである。アレンスは、「彼のみが夜間にもはっきりと物が見える。」<sup>12)</sup>と述べているが、生身の人間である彼に神話的人物の能力を認めることには同意できない。もしリュンコイスに夜目が効くのなら、メフィストと三人組が夜間に礼拝堂の方へ馬を馳せる様を見ていなければならない。そのような特殊な出来事を見張ることこそ夜警の役割であり、また行く先が、最も主人の関心をひいている土地なのであるから尚更のことである。それゆえ彼がいま歌っているのは、闇に覆われることで純化され、現在という時間的限定性を超えた「永遠の装い (V. 11297)」なのである。

この意味で世界を「見る」ことは、ファウストには拒まれていた。たとえば彼が、望楼を作り、自分が「人間精神の傑作 (V. 11248)」と呼ぶものを一望のもとに見はるかそうとも、彼はリュンコイスのように愛を込めて「見る」ことは

できない。どの瞬間に向かっても「お前は美しい」と呼びかけることのできないファウストに対して、自分の見たものは「どのようであろうとも、いかにも美しかった(V. 11302f.)」と感じるリュンコイスは、もう一つの対極として、フィレモンとパウキスに併置されるべき人物である。

だが、全世界を愁わせている筈の闇の中から、突然彼の鋭い視力に浮かび上がるものは、その世界の崩壊を意味する禍々しい炎である。「幾千年(V. 11337)」もの時間と同じ意味を持つ菩提樹や礼拝堂が燃え落ちる様を傍観していなければならぬリュンコイスの悲痛な嘆きは、ファウストにさえ哀れを催させる。しかしファウストは、まだそれによって失われたものの実体を知らず、自分を空しい希望で慰めるが、メフィストから「事実」の報告を受けた彼が、「交換を望んだのであって、掠奪をではない(V. 11369)」と叫ぶとき、そこには、先にフィレモンとパウキスの存在の意味について述べられた理由において、単なる言い訳以上の真実が含まれているのである。彼がメフィスト達に投げつける呪いは、本物である。

そして、バルコニーに立って焼け跡を眺めるファウストに、四人の灰色の女達が迫ってくる。これらのデーモン達に関しては、従来その破壊的な要素に立脚して解釈が為されている。確かにそれらは人間を苦しめるものであるがゆえに当然なのだが、しかし、ここでは、それらが人間に及ぼす積極的な働きを見逃してはならない。特に、「欠乏」や「困窮」や「負債(罪)」は、それらを克服するための活動を人間に強いるものである。これは丁度「主」が「天上の序曲」で「いたずら者(V. 339)」のメフィストフェレスに認めた役割と共通性を有している。それゆえ Mangel, Not, Schuld の三者がファウストに近づけないことを、彼がその地位によって、それらの届き得ないほどに成長したと、肯定的に理解するならば、それらが登場する本来の理由を見失うことになる。逆に、彼が富裕になってしまったばかりに、それらの有益な刺激の恩恵に与れなくなっていると見るべきなのである。それだからこそ、彼は「話の意味は分からなかった。(V. 11399)」と独白する。フィレモンとパウキスの生活が活力に満ちたものであったと先に述べたが、それは、「欠乏」と「困窮」との闘いと無縁ではなかった筈である。そして Schuld については、その「負債」という意味においても、「罪」という意味においても、特に「旅人」との関連が深いのではないだろうか。何故ならば、彼の「財宝」がフィレモンによって難破から救い出されたという経緯が存在するからである。

言うまでもなく、一般に財宝は「負債」や「罪」に結び付きやすいものであるが、特に『ファウスト』第二部では、その側面が強調されている。<sup>13)</sup>ヘレナに捧げられたリュンコイスの財宝は、「幾多の血ぬられた闘いの収穫(V. 9315)」



であり、第二幕での蟻や侏儒たちの黄金は蒼鷺の虐殺を誘発し、また第一幕で埋蔵金を担保として発行された紙幣は、内乱の遠因ともなっている。そして、第五幕では、メフィストと三人組が海賊行為によってファウストのもとへ財宝をもたらしている。

しかし、Sorgeを含めたこれら四種のデーモンが、ただフィレモンとパウキスのもとにのみ在るのではなく、人間世界全般に遍在することは、論ずるまでもない。それでもなお、それらが、登場人物としては、フィレモン達の「火葬の薪 (V. 11369)」から立ちのぼる煙雲に発して、「影のように (V. 11383)」ファウストのもとへと漂ってくるわけは、ファウストの生き方に対する批判的な対極としての老夫婦の存在意義ゆえなのである。そしてただ Sorge のみがファウストに近づける所以は、ファウストが上述の危機的状況のもと第五幕に現れた時点で、既に「憂愁」を胸に秘めていたからである。彼女は、ファウストの内部にあったものが外在化した寓意的形象である。彼女が「とにかく、ここにいる (V. 11421)」と言い、「いるべき所にいる (V. 11422)」と言うのは、当然なのである。アレンスは、「宮殿」の場でファウスト自らは Verdrub (V. 11154) と呼んでいるものが実は Sorge である、と述べている<sup>14)</sup>。

それゆえ、「真夜中」は、ファウストが初めて Sorge と対面する場面ではなく、一歩進んで、それまで彼を苦しめてきた Sorge を克服する対決の場なのである。そして、これは彼がはっきり魔術と手を切る機縁ともなっている。

「用心しろ、呪文など唱えるな。(V. 11423)」

彼は Sorge の力を否認するが、彼女に息を吹きかけられて失明する。彼女は「人間はすべて、一生のあいだ盲目 (V. 11497)」であると告げ、「今こそ、ファウストよ、お前も遂には盲目になれ!」との呪いをかけるのである。しかしファウストは、Sorge の登場以前から既に「憂愁」に取り憑かれていたように、「遂に」そうなる前から潜在的な盲目性に浸されていたとは言えないだろうか。彼には、どんな呪われた連中が彼の「天国的な土地 (V. 11569)」を作っていたのか、見えていなかったのであるから。ここでの盲目性も、やはり内在していたものが外在化した、と言える。そして Sorge の頭在化がその克服へと直結したように、この失明は、その否定的側面を止揚して、「内なる明るい光 (V. 11500)」を誕生させる契機となっているのである。また彼は、自分の為に掘られる墓穴を、それと気付くことのないために、迫りくる死の確実性に打ちのめされる必要がない。この意味においてならば、エムリッヒの「死に対して盲目」<sup>15)</sup> という主張は正しい。

ファウストには、上述のリュンコイスのように純粋な「見ること」による一種の「世界所有」は拒まれていた。しかし、いまや盲目となることで、「そのよ

うな群衆を私は見たいのだ (V. 11580)」と言うとき、彼は、その光景に内包される真実を所有できるのである。

ロゴスを「行為」と翻訳し、若返った生涯をその実行に費やしたファウストの試みは、これまで述べた観点から言えば、壮大な失敗に終わっている。しかし、彼が最後に懐いたヴィジョンは、ファウストの精神が勝ち得た新たな志向を表明しており、現実面での空虚さを補って余りある。それは、「天上の序曲」で天使達が讃える神の創造の御業、永遠なる繰り返しの肯定に通じるものなのである。ファウストに於いては、それはまだほんの萌芽にすぎず、かすかな火花なのだが、これこそ「盲目」となることによって勝ち得た上述の「内なる明るい光」なのであり、彼の人格からして、それは確実に花開き、燃え上がることが予感される。第一部でのファウストは、ロゴスをただ解釈し、翻訳したにすぎなかったのだが、いまここで彼は、「言葉」「意味」「力」「行為」を越えたロゴスの実質を体験したとも言えるであろう。

そして、ファウストがメフィストと交わした賭けの言葉、瞬間に向かったの「とどまれ、いかにもお前は美しい」の意味内容が、ここに於いて、賭けを失う条件ではなく、救済の要件に転化している。これは次のように言い換えてもよいであろう。ファウストはメフィストとの賭けに敗れたのだが、この同じ言葉によって「主」はメフィストに勝ったのだと。対象への愛を認めるこのキーワードが、主体のどのような状態のもとに言われるかが、問題なのであった。そしてファウストは、彼の人格の総力を挙げての努力のうちに、即ち、彼のエンテレヒーの最高度の発揚のうちに、その言葉を発したのである。救済の条件は整った。彼には「永生 (Fortdauer)」が準備されなければならない。ゲーテはそれを自然の義務だと見做す。

「私にとって、我々の永生の信念は、活動という概念から湧き出してくる。なぜなら、私が最期の時まで休むことなく活動するならば、自然は私に別の存在形式を割り当ててくれる義務があるからだ。現在の形式ではもはや私の精神を持ちこたえられないときには。」<sup>16)</sup>

この理念の文学的実現は、一種の神秘劇として、「埋葬」と「峡谷」の場において成されることになる。しかし、それは本論の主題を越えている。その分析はまた別の機会に譲りたい。

## 註

1) Gundolf, F: Goethe. Berlin 1925. S. 764.

- 2) 試みにキリスト教の倫理に照らしてみただけでも、ファウストの犯した罪は、モーゼの十戒の殆どを網羅している。まず、魔術に手を染めることは、それだけで既に瀆神と偶像崇拜に数えられよう。グレートヘンとの姦淫、その母と兄に対して殺人。当てにならない埋蔵金を担保にした紙幣の発行は、一種の窃盗と見做せる。安息日の遵守や妄言などについては触れる必要もないであろう。そして隣人に対する虚妄の証しと隣人の家を食べることを禁じた第九と第十の戒めに、ここでファウストは抵触している。
- 3) Schlaffer, Heinz : Faust Zweiter Teil. Die Allegorie des 19. Jahrhunderts. Stuttgart 1981. S. 139.
- 4) Eckermann, J. P. : Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. 6. 6. 1831.
- 5) Kommerell, M. : Faust Zweiter Teil. Zum Verständnis der From. In : Dame Dichterin und andere Essays. München 1967. S. 145.
- 6) May, K. : Faust II. Teil. In der Sprachform gedeutet. München 1962. S. 250.
- 7) ebd.
- 8) 古典的ヴァルプルギスの夜も一種の破局と考えてよい。そこではファウストの代わりにホムンクルスが破滅する。詳しくは、次の拙論を参照されたい：「古典的ヴァルプルギスの夜」に於ける死の克服。鹿児島大学文科報告 第25号 第3分冊 1990年9月115～130頁。
- 9) 6. 6. 1831. これが、彼の誕生から数えた本来の年齢なのか、それとも魔女の廚で若返った分を差し引いたものなのか、即ち、ファウストの精神が経て来た年月なのか、または彼の肉体が現在耐えている衰弱の度合いであるのかは、定かでない。また、その断定は困難である。何故ならば、『ファウスト』第二部には、幾つかの箇所不明確な時間的断絶が生じているからである。「古典的ヴァルプルギスの夜」で冥い通廊に姿を消してからゲルマン民族の長として登場するまでの時間は、瞬時と見るべきだろうか。その場合には、論理的帰結として、ファウストにとって自分の部下達は総てメフィストの力に支配された一種の幻影であったことになる。または、現実の人間である部下達の間には彼が地位を獲得するまでの積み重ねが必要だったのだろうか。そして、もしかしたらヘレナが再来するまでには、ホムンクルスが肉体として「成立する」と同じだけの経緯が要求されるのかも知れず、それはまた別種の、言わば詩的な時間単位で数えるべきものであろう。ほぼ同様のことが、アルカディアでの時間経過の、外界の人間への関係についても言えるであろう。
- 10) a. a. 0., S. 258.
- 11) 塔守リュンコイスは、その特技を除いて、ギリシャ神話のリュンケウスとは無関係と解釈すべきであろう。リュンケウスが残している黥しは、さほど華々し

いものではない。まず山猫(リュンクス)の名を負うに相応しい視力を活かし、イアソンの率いるアルゴ船で見張りを務めたこと、他には婚約者又は牛の群れをめぐり兄イーダースと共にディオスクロイの二人と生死をかけて戦ったというほどのものである。この経歴からすれば、彼がファウストの臣下として第三幕でヘレナに挨拶するのはおかしなことになる。第一に彼はゲルマン人ではなく、そして第二にヘレナは仇敵ディオスクロイの妹だからである。また、第三幕と第五幕のリュンコイスが肉体的に同じ人物であるのかという疑問も無視されてよい。本質が一貫しているからである。

- 12) a. a. O., S. 873.
- 13) エムリッヒは、財宝というモチーフについての多面的な考察を行っている。Vgl. Emrich, W.: Die Symbolik von Faust II. Sinn und Vorformen. 3. Aufl. Frankfurt am Main • Bonn 1964. S. 402.
- 14) Arens, H.: Kommentar zu Goethes Faust II. Heidelberg 1989. S. 850.
- 15) a. a. O., S. 397.
- 16) Eckermann. a. a. o., 4. 2. 1829.